

高等学校

平成 11 年 度

教育研究員研究報告書

芸術（音楽）

東京都教育委員会

平成11年度

教育研究員名簿(音楽)

学 校 名	氏 名
都 立 芸 術 高 等 学 校	河 内 さ お り
都 立 石 神 井 高 等 学 校	白 井 賢 一
都 立 板 橋 高 等 学 校	○ 川 口 深 雪
都 立 白 鷗 高 等 学 校	◎ 和 田 紳 一
都 立 南 葛 飾 高 等 学 校	今 法 子

担 当 指導部高等学校教育指導課 市川治郎
都立教育研究所企画調査部 山下 哲

研究主題

音楽を通して、生徒が互いに尊重し合い自己発見を促す授業の在り方

目次

I 主題設定の理由	2
II 研究の経過	3
III 指導事例	
【指導事例 1】	
高校生の音楽に対する意識調査	4
【指導事例 2】	
フェイクの手法を使った作曲指導（音楽Ⅲ）	8
【指導事例 3】	
コミュニケーションを通して楽曲理解を深め、 豊かに表現するための合唱指導（音楽Ⅱ）	12
【指導事例 4】	
生徒が互いに聴き合いながら自分の音をつくっていく三味線指導（音楽Ⅱ）	16
【指導事例 5】	
生徒が自由に作り上げる課題学習（音楽ⅠⅡ）	20
IV 研究のまとめと今後の課題	24

I 主題設定の理由

現代の高校生は多様な音楽に取り巻かれて生活している、音楽は彼等の生活と切り離せないものになっており、気が向けば、いつでも自分の好みの音楽を選択し楽しむことができる。また、街頭でギターを手に歌っている若者を見るたびに、彼らの音楽に対する情熱に感嘆せざるを得ない。現代の高校生は、音楽の楽しさを十分享受し、音楽を生活を豊かにする手段として見事に活用しているようである。

一方、我が国の音楽の専門教育（早期教育）は、欧米にも広く認められているところであり、専門高校（音楽科）では、専門的な知識・技術を身に付けるため、日々研鑽を積む高校生の姿がある。こうした専門教育の結果、今や我が国は、世界的な日本人演奏家や、注目される若手音楽家が輩出する時代を迎えている。こうした我が国の社会に普及、浸透している音楽に、公立高校における音楽の授業がこれまでどうかかわってきたのだろうか。こうした大きな問題を感じつつ、研究員一同、所属する学校の生徒の実態についての意見交換に時間をかけた。その結果、様々な高校生の姿と課題が浮かび上がった。

- ① 合唱活動には積極的であるが、その他の活動にあまり興味を示さない傾向がある。
- ② 教師との信頼関係を築くまで時間がかかり、声や感情をあまり表に出さない生徒が見られる。
- ③ アンサンブルの際、互いの演奏する音を十分聴き合わないため、音楽的なまとまりが不足しがちである。
- ④ 音楽的な表現をするために意見を述べたり、他人の音楽解釈を認めたがらない傾向がある。
- ⑤ 教科書に取り扱われている教材に、概して興味を示さない。
- ⑥ 最近、専門学科高校でも多様な生徒が入学して来るようになった結果、音楽的な技量の個人差が以前より大きくなってきている。

こうした課題は、普通科専門学科ともに、価値観の多様化の進展という社会の大きな流れに、高校生の発達段階特有の悩みが加わり、生じていると思われる。教師は、音楽が感情（情緒・情動）の働きと深くかかわる教科であることを再確認し、多感な高校生たちの心に、芸術（音楽）の果たす役割を十分考えて授業を行う必要がある。この視点から、音楽の授業で教師が生徒に、第一に何を身に付けさせたいか話し合ったところ、次の2点に絞られた。

① 音楽を通して生徒同士が互いに尊重し合う態度や能力。② 音楽を通して、自分の感じ方（感性）や表現に自信をもたせ、自己発見する力を身に付けさせる。

この能力を伸ばすためには、表現活動の際、音をよく聴き合い互いの表現意図を感じ合う場をできるだけ多く設定し、声部の役割や自他のパート相互の関わりを把握させ、考えさせることで、主体的な表現や自己発見へとつながるのではないかと考えた。

次に、どう授業を工夫すれば、新鮮な気持ちを保ちながら練習を続け、音楽的に満足の得られる表現へと高める指導ができるかが大きな課題である。このために、教師は、生徒が音楽の授業に何を求め、何を感じているかをしっかり把握する必要がある。また、教材については、多感な時期の揺れ動く感情を映し出した教材を開発し、教師が生徒の反応を受け止める工夫をすれば、個々の生徒の内面において、主体的な音楽活動が可能になると考えた。このように、生徒理解と教材開発を工夫をすることによって、音楽を通して、生徒が互いに尊重し合い自己発見を促す授業を展開できるものと考え、本研究主題を設定した。

Ⅱ 研究の経過

【4月】

月例会において、各学校の実状について、意見交換し合うことから研究主題の設定に向け研究を開始した。

【5月】

授業の現状と課題について討議した。各学校からの報告に基づき、高校生の音楽に対する意識や趣味はどの程度多様化しているのか、という声が出された。また、指導法については、合唱における声に関連した課題が多く出された。いかに豊かな声を出させるか、授業における雰囲気づくりをどのように工夫するかについて、研究を進めたいとの意見が多く出された。

【6月】

前回の確認を受け、高校生の音楽に対する意識の多様化について引き続き検討した。こうした生徒一人一人に応えるため、「主体的」という文言を研究主題に含めたいと考え、「多様化する音楽環境において、生徒が生き生きと、主体的に活動するための授業の研究」と主題を設定した。しかし、この中の音楽環境とは、どこまでの範囲を研究として取り扱うか、また、言葉として広くとらえ過ぎであるとの意見が出され、さらに検討を続けることとした。

【7月】

指導案を作成するにあたって、具体的にどのような内容にをするか検討した。その結果、テーマを再考する必要が出て、「多様化した生徒の興味関心を生かした指導の工夫」とした。また、「生き生きとした」という文言を、サブテーマとして盛り込む方向で検討した。

【8月御岳集会】

生徒の個性を一層重視する趣旨をより明確にするため、さらに主題を検討する必要が生じた。音楽には、人と人とを結ぶ力があり、心を動かす力があることを踏まえたいという意見から、「多様化する生徒を受け止め、生徒の個性を生かし、音楽によるコミュニケーション能力を高める授業の在り方」と主題を設定した。しかし、音楽におけるコミュニケーション能力へのアプローチが難しく、むしろ教師の生徒理解と生徒の音楽に対する自己理解を、深めることを重視するべきである。と考えた結果、生徒が音楽の授業を通して、自己発見（これまでにない新しい自分の感じ方に気付く）を促す必要があると結論が出た。「音楽を通して、生徒が互いに尊重し合い自己発見を促す授業の在り方」という主題を正式に設定した。

【9月】

8月の御岳集会の成果を基に、指導法の工夫の具体化に向け協議を深めた。報告書作成を念頭に置き、まとめ方を協議した。その結果、高校生の音楽の意識の多様化について検証するための、意識調査を事例に含めることにした。

【10月、11月】

所属校の生徒を対象に、高校生の音楽に対する意識調査を実施した。報告書の作成に向けて、研究主題に沿って具体的な事例を持ち寄り原稿の推敲、まとめ作業を行った。これと併行して、2月の研究発表に向けて、本研究主題を生かす指導案づくりを目指し、検討作業に入った。

1 調査の目的

高校生の音楽に関する意識や嗜好が、専門高校（音楽科）の生徒と、普通科の生徒との間での程度共通する部分があるのか。この疑問がこの調査の動機である。研究員一同、この調査を通して、専門高校（音楽科）と普通科の共通点である「現代に生きる高校生」の意識と嗜好の実態に迫りたいと考えた。

次に、専門高校（音楽科）では、これまで、我が国の音楽文化を支える専門家を育成することを目指し、専門教育を行ってきた。しかし、専門高校（音楽科）に入学してくる生徒の多様化が進みつつある現在、社会の変化とともに、専門高校（音楽科）に対する期待が変化してきているのではなかろうかと考える。このことから、専門高校（音楽科）の生徒を対象とした、専門科目に関する意識調査を併せ実施することとした。

1 質問項目

普通科対象

- ①日常好んで聴く音楽はありますか。
- ②「ある」と答えた人に質問します。主に聴く音楽のジャンルは何ですか。（表1）
- ③クラシックと答えた人に質問します。好きな理由はなんですか。（表3）
- ④クラシックと答えた人に質問します。好きな曲目を書いてください。
- ⑤クラシック以外を選んだ人に質問します。クラシックを主に聴かない理由はなんですか。（表4）
- ⑥演奏できる楽器はありますか。
- ⑦「ある」と答えた人への質問。演奏できる楽器と経験年数を答えてください。
- ⑧「ない」と答えた人に質問します。楽器を演奏できるようになりたいですか。
- ⑨「できるようにになりたい」と答えた人に質問します。楽器の種類はなんですか。
- ⑩好きなアーティストがいれば書いてください。またその理由を書いてください。
- ⑪音楽を聴いているとき、あなたが良いと思う演奏はどんな演奏ですか。（表13）
- ⑫日本の伝統音楽について知っていることがあれば書いてください。

音楽科対象

- ①音楽を専門に勉強したいと思ったのはいつですか。
- ②音楽を勉強するに当たって、誰と相談しましたか。
- ③普通科の⑬と共通（表2）
- ④本校の音楽科目の中で好きな科目があれば3教科以内で書いてください。（表5）
- ⑤本校の音楽科目の中で嫌いな科目があれば3教科以内で書いてください。（表6）
- ⑥本校の音楽科目の中で絶対に必要と思う科目を3教科以内あげてください。（表7）
- ⑦本校の音楽科目の中で履修するの必要のないと思う科目あれば3教科以内であげてください。（表8）
- ⑧現在は本校にない科目で、今後勉強してみたい科目・分野があればあげてください。（表9）
- ⑨普通科の①と共通（表1）
- ⑩演奏するとき音楽的な演奏をするために気をつけていることがあれば書いてください。（表15）

⑬中学校の音楽の授業で印象に残っていること、楽しかったことがあれば書いてください。

⑭高校の音楽の授業で取り上げてもらいたい分野を書いてください。

①普通科の①と共通（表13,14）

②あなたにとって音楽とはなんですか。

③あなたは将来、音楽とどのようにかわりたいですか。（表16、17）

2 調査時期・調査対象 平成11年11月中旬～下旬・対象は今年度の研究員が所属する都立高校、全日制課程（普通科4校、音楽科1校、音楽選択者のみ、生徒317名 普通科221名、音楽科96名）

3 調査結果（自由記述は省略）

(表1)

日常主に聴く音楽のジャンルはなんですか	普通科 割合	音楽科 割合
ポップス（日本）	42	25
ポップス（外国）	17	18
ロック	15	8
ジャズ	4	4
歌謡曲	6	2
クラシック	10	37
日本の伝統音楽	0	1
その他	6	5

(表2)

中学校の授業で印象に残っていること、楽しかったことがあれば書いてください。	普通科 割合	音楽科 割合
各場コンクールの練習	16	29
行事の時の歌の練習	3	2
発表会	4	6
合唱	8	3
歌謡	14	2
リコーダー	4	3
音楽（リコーダー）	3	10
合唱	5	6
鑑賞	7	0
その他	5	5
なし・無回答	31	34

(表3)

クラシック音楽を主に聴く理由はなんですか	普通科 割合
聞き流す・聴かれる	31
飛脚（アコースティック）が好き	3
飛脚をやっているから	21
おもしろい	7
周りの人が聴いている	7
曲の感じが好き	21
集中力がつく	3
理由なし・その他	7

(表4)

クラシック音楽を主に聴かない理由はなんですか	普通科 割合
テンポ・ノリが悪い	17
聴くなる・通じ	12
興味がわかない	1
曲のイメージが悪い	7
嫌い	1
聴かすぎる	8
聴く機会がない	6
分からない	4
他のジャンルが好き	8
ジャンル・曲を知らない	1
周りの人が聴いていない	8
理由なし	12
CDがない	5
全く聴かないわけではない	2
興がない・興が理解できない	4
その他	4

(表5)

好きな音楽科目はなんですか。（3科目以内）	音楽科 割合
専攻	15
第一副科	10
第二副科	11
アンサンブル	16
演奏法	6
鑑賞	8
ソルフェージュ	5
音楽史	7
和声	2
楽典	1
対位法	1
楽式	6
オーケストラ	7
コーラス	5

(表6)

嫌いな音楽科目はなんですか。（3科目以内）	音楽科 割合
専攻	1
第一副科	6
第二副科	7
アンサンブル	0
演奏法	0
鑑賞	7
ソルフェージュ	15
音楽史	6
和声	8
楽典	11
対位法	1
楽式	1
オーケストラ	2
コーラス	10
なし	25

(表7)

絶対に必要だと思う音楽科目はなんですか。（3科目以内）	音楽科 割合
専攻	29
第一副科	9
第二副科	3
アンサンブル	4
演奏法	1
鑑賞	21
ソルフェージュ	7
音楽史	7
和声	5
楽典	6
対位法	0
楽式	2
オーケストラ	6
コーラス	2
分からない	1

(表8)

履修する必要がないと思う教科はなんですか。（3科目以内）	音楽科 割合
専攻	2
第一副科	4
第二副科	13
アンサンブル	4
演奏法	17
鑑賞	2
ソルフェージュ	7
音楽史	3
和声	2
楽典	2
対位法	1
楽式	1
オーケストラ	13
コーラス	3
分からない	26

(表9)

現在は履修されていないが、勉強してみたい科目・分野はなんですか。（複数回答可）	音楽科 割合
日本の伝統音楽	10
指揮法	8
作曲	4
コンピュータ	1
作曲個別テーマ学習	8
音楽療法	2
音楽マネジメント	1
オルガン	1
ジャズ	4
民族音楽	6
公開レッスン	3
受検対策講座	2
語学（ドイツ語・フランス語）	2
美術	10
哲学	3
なし	35

(表10)

アンサンブルは好きですか。	音楽科 割合
好き	87
嫌い	3
どちらとも言えない	10

(表11)

アンサンブルが好きな理由はなんですか。	音楽科%
友達と共演できるので楽しい	43
一人では分からないことが得られる	25
いろいろな楽器について知ることができる	3
ハーモニーの奥しさを追究できる	15
いろいろな曲を演奏できる	3
緊張感がある	4
その他	7

(表13)

音楽を聴くときによいと思う演奏はどんな演奏ですか	普通科%
落ち着く・癒される	10
心に響く・感動する	7
演奏技巧が凝れている	4
テンポ・ノリがよい	10
歌詞が良い	2
音がよい	8
メロディーがよい	5
バラード調の曲(泣ける曲)	5
ソロ・サビのある曲	8
伝えたいことが明確な曲	3
その他	6
分からない・無回答	32

(表16)

あなたにとって音楽とはなんですか。	音楽科%		
	1年	2年	3年
生きがい・よりどころ	27	29	43
好き・楽しい	16	10	8
自分を人間として向上させるもの	16	6	9
自分を表現できるもの	11	23	11
身近にあるもの・生活の基盤	11	25	11
よく分からない・答えにくい	19	4	17
その他	0	3	1

(表12)

本校入学以前にクラブ活動や地域の音楽活動に参加していましたか	音楽科%
オーケストラ	13
ブラスバンド	20
唱歌部	4
コーラス	12
軽音楽・バンド	3
音楽合奏・室内楽	6
音楽クラブ	6
その他	3
参加していない	33

(表14)

音楽を聴くときによいと思う演奏はどんな演奏ですか	音楽科%
落ち着く・癒される	19
心に響く・感動する	15
演奏者の意識が明確	10
作曲家の意図を正確に再現している	5
個性がある	4
音がよい	7
上手いという技巧を感じさせない	2
自然な音楽の流れがある	7
音楽の世界に引き込まれる	10
その他	12
分からない・無回答	9

(表17)

将来音楽とどのように関わっていききたいですか。	音楽科%		
	1年	2年	3年
将来音楽家としてやっていきたい	46	54	67
できれば音楽家としてやっていきたい	24	15	4
趣味として音楽と関わっていきたい	3	13	4
分からない	27	8	25

(表15)

音楽的な演奏をするために気をつけていることはなんですか	音楽科%
感情を込める	9
自分の表現したいことを明確に伝える	8
自分の演奏している音をよく聴く	6
作曲家の意図を正確に再現する	8
曲の背景・スタイルを考慮する	8
呼吸する	7
フレーズ・音楽の流れを	4
膝を十分に緩め	5
演奏するときの姿勢	3
音のイメージ・音色・音の美しさ	11
聴衆の立場・自己満足にならないように	5
感性を磨く	3
力まない・自然体で	8
その他	7
分からない・無回答	8

4 考察とまとめ

【普通科、音楽科共通の質問】

- ・日常、主に聴く音楽のジャンルについての質問に対しては、クラシック音楽を聴くのが回答が音楽科が37%、普通科が10%であるのに対して、ポップス(外国)、ジャズがほぼ同じであるのが興味深い。(表1)
- ・中学校の授業についての質問では、普通科、音楽科共に合唱コンクールをあげている。また、同じく、なし、無回答が30%を越える結果となった。これは中学校の音楽の授業における合唱コンクールの成果とともに、なし、無回答の意味は重く受け止める必要がある。また、合唱の練習が音楽科29%とあるのは、ピアノの伴奏で活躍した経験があると思われる。また、鑑賞の授業に関して、音楽科が0%という結果は、上記の無回答とともに、高校における鑑賞の指導法の工夫、改善が必要であることを物語っている。(表2)
- ・良いと思う演奏はどんな演奏かという質問に対して、普通科、音楽科とも、落ち着く、心が癒されるという回答が上位を占めている。また、音楽科の生徒の意識は高い。普通科の生徒に、分からない・無回答が多いのは、良い演奏について日常的に考える機会が少ないのが理由であろう。(表13、14)

【普通科生徒対象の質問】

- ・生徒の音楽嗜好については、好きなアーティストについての回答が個人、グループ併せて、約80グループが挙げられた。各グループについて1~2名の支持が多い。限られた対象に熱中する傾向がある。この点において、音楽の嗜好はやや確立されていると言える。(自由記述)
- ・好きな理由としては、歌詞が良い、曲が良いの他、かっこいい、アーティストの生き方に共感できる等の理由を挙げているのが特徴である。(自由記述)このことから、音楽の良い点に多方面から迫る指導を心掛けることが必要である。
- ・クラシック音楽を聴く理由として、落ち着く・癒される。という回答が上位を占めている。このことは、クラシック音楽への固定的な見方を受け取れるとともに、ストレスの強い現代

に生きる高校生の姿がうかがえる回答である。(表3)

- ・クラシック音楽を聴かないという回答については、クラシック音楽を拒否するというより、単に興味や関心がわからない、何から聴いたらよいか分らない等の理由を挙げている。さらに、聴く機会がない、曲名が分からないのでCDを買えない、周囲の人が聴いていない等の回答から分かるとおり、身の回りの環境を原因にあげている。(表4)
- ・我が国の伝統音楽について無回答および分からないという生徒が60%であった。しかし、この調査については、日本音楽を積極的に取り入れている学校では、生徒の意識は比較的高いとの傾向が出ている。(自由記述)
- ・高校の音楽の授業で取りあげてほしい分野では、器楽演奏がもっとも多く、歌唱および合唱、創作(作曲)、鑑賞の順に希望があったが、領域に関係なく流行歌を取りあげてほしいという意見が多い。(自由記述)

【音楽科生徒対象の質問】

- ・好きな科目に実技を、嫌いな科目に理論系の科目をあげる傾向がみられるが、(表5、6)全体としては、専攻やソルフェージュ(視唱)、聴音等、音楽の基礎についても意欲的に取り組んでいる様子が見られる。
- ・今後、勉強してみたい教科として、美術、哲学などの芸術の関連科目と日本の伝統音楽が上位を占めている。また、音楽療法、ジャズ、音楽マネジメント、民族音楽など、多様な興味をもっている生徒がみられる。(表7~9)
- ・地域の音楽活動への参加状況の調査から、入学以前にクラブ活動や、地域の音楽活動など集団で音楽をした経験のない生徒が33%みられた。(表12)
- ・アンサンブルに関する質問では、アンサンブルを通じて、他者と関わりながら、自分の表現方法の幅を広げ、演奏する喜びを共有できる素晴らしさを感じる。と回答した生徒が多くみられた。これまで、レッスンを中心に勉強を続けてきた生徒たちにとって、コミュニケーションを深めることに魅力を感じていることが分かる。(表10、11)
- ・音楽的な演奏をするために気を付けていることはありますかという質問では、普段どのような指導を受けているか推測できて興味深い。また、自己表現するための具体的な手段についての回答が多く見られる。(表15)
- ・音楽を専門に勉強したいという目的を持って入学した生徒が、学年が進むにつれて、音楽と自分との結びつきを深く自覚していることが分かった。(表16、17)
- ・あなたは将来、どのように音楽と関わっていきたいですかという設問については、自由記述から意欲を読みとり、4つのグループに分類した。(表17)

この調査から、普通科の生徒では、嗜好の多様化が好きなアーティストについての質問で端的に現れている。また、中学校の音楽との関連が十分にとれていないことについては、高等学校の大きな課題である。専門高校(音楽科)の生徒は、日々、真摯に音楽と向き合っている姿が浮かび上がっている。アンサンブルについても積極性を示している。しかし、自分の将来については、彼等なりの悩みを抱えていることが回答から読み取れる。今後さらに、技術の向上とともに、音楽の活動を通じて他者を意識すること、音楽の本質を見つめさせる機会をもたせるような授業のあり方を工夫することが必要になるものと考えられる。

- ・教材で取り上げ、歌った曲のコード進行を使って、歌詞をつけずに「lalala～」や「lululu～」等のスキヤットでフェイクする。次に、最近の流行の歌のコード進行を使ってフェイクする。その後、好きな曲の部分を取り上げ、その部分のコード進行を使ってフェイクする。慣れてきた段階で、即興の歌詞をつけてフェイクする。

2 学期（12時間扱い）

- ・バンド活動に向けて、そのグループ編成（希望をとる）をする。
 - ・ベースラインをフェイクする。その際、ベースラインを演奏する時はベースギターを用いる。また、キーボードでベースギターの音色を作成して演奏しても良い。
 - ・バンドを組む。その際に必要な楽器の知識、演奏技術を教える。
- ① ドラムのセッティング及びリズムパターン等奏法に関する技法
 - ② ギターのコードの種類と押さえ方等
 - ③ ベースギターベースラインと演奏法
 - ④ キーボードの音色の作り方と演奏法
 - ⑤ コードネームについての知識
- ・コード進行の設定をする。ドラムのリズムとベースラインを決定。メロディーにつける歌詞が決まっていれば、そのイメージに合うように工夫する。
 - ・ドラムのリズムとベースラインにギターのコードを加え、基本パターンを完成させる。次に、その上に声をのせる。

3 学期（6時間扱い）

- ・互いのパートが演奏効果を発揮できるようにバランスの取り方を教える。
- ・効果を考えてキーボードの音を加える。また、必要に応じて、その他の楽器を加える。
- ・完成後、発表する。

4 評価の観点

- ① バンド内で、他者のフレーズに耳を傾け、自分のアイデアを提案することができたか。
- ② 演奏効果を考えて工夫することができたか。
- ③ バンドとしてまとまりのある活動ができたか。
- ④ 創作に必要な楽譜や楽器の知識・技術など基本的な事項を身につけることができたか。

5 仮設検証の視点

- ① バンド活動を通して、曲を作り上げていくことによって、他者の音楽性を感じ取り、新たに自分の音楽性に気付いたり、協同して音楽をつくり上げる能力が培われるのではないか。
- ② フェイクの実習によって自分のオリジナルな音楽をつくり出す喜びを味わるとともに、ポピュラー音楽に対する理解を深めることができるのではないか。
- ③ バンド活動を通して、それぞれのパートの役割についての理解と相互のバランス感覚を身に付けることができるのではないか。

6 学習活動の展開

指導内容	学習活動	指導上の留意点
【第1次】	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の進行予定を確認する。 ・ドラムセット、ベースギター、ギター、キーボード、マイク、アンプ等のセッティングをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的に確認させる。 ・安全な運搬を心掛けさせる。 ・正しいセッティングができるように指導する。
<p>【第2次】</p>  <p>①ドラムのリズムの確認をする。</p>  <p>②ベースラインをリズムの上ののせる。</p>  <p>③ギターでコードを刻む。</p>	<p>④（上記の①～③は録音しておき）時々テープ再生して聴き、曲を作る作業をすすめていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒たち自身で課題を発見していくことができるように配慮する。 ・バンド内で十分な意見交換の時間を確保する。 ・各パートのフレーズの持ち味を邪魔しないフレーズ作りをさせる。

【第3次】	<ul style="list-style-type: none"> ・最終的に録音したものをバンドで聴き、日誌に記録しながら次の作業内容の計画を立てる。 ・使用した楽器、及び機材を片付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的に記録させ、計画を立てさせる。 ・安全な運搬を心掛けさせる。
-------	--	---

7 評価の工夫

- ① 日誌を記入するとともに、録音したテープを提出させる。
- ② 完成後、各バンドごとに作品の発表をし、互いにその作品を聴き合うことにより、相互評価する場を設ける。

8 考察

「フェイク」に関しては、生徒たちは最初、興味を示さなかった。まず、フェイクの手法で作られている歌を聴くことから始めた。フェイクについて、例を示した後、表現させてみると次第に興味を示すようになった。そのうち生徒たちは「鼻歌選手権」などという呼び名をつけて、面白がるようになった。創作活動は本来楽しいものであり、難しいものではなく、だれにでもできるものであると分かると、積極的に楽器のセッティングをする姿が見られた。また、自分たちのバンド演奏の録音を聴き合っ、感想を述べ合うなど積極的に取り組むようになった。ただ、音楽室といっても完全な防音ではないため、ドラム演奏の際には他の教室に気を遣いながら叩くなど配慮する必要があったが、全体を通して彼らの音楽性を伸び伸び発揮させることができた。バンド活動を通して、完成を目指してメンバーと意見交換を重ね、相手の聴き方感じ方、表現意図を知ることで、自分の音楽性や感性について知る、という目標は達成された。音楽を介して交わされるコミュニケーションは、言語では伝え切れない微妙な要素を伝達することができる。その楽しみや価値を生徒たちに味わってもらうことがこれからの課題である。



日誌 (12)月(3)日(木)曜日(5.6)時間目

作業(20)時間目

【本時の作業予定】

(全体として)

ドラムのリズムパターン・ベースラインを変化させながらコードをギターで弾き、フェイク(歌詞つきで)していく。キーボードの音を加える。

【コメント】

ドラムス 担当者 ()	歌とたたき、欲して渡れたけれど、いろいろなリズムパターンもベースラインと合わせたら雰囲気違う感じがたてこん出来ておもしろかった。朝にいろいろ合うものを早く済ませたい。
ベースギター 担当者 ()	リズムパターンもベースラインの作り方がいろいろ変わることを今でなければいけないと、ハマった。もうちょっといろいろ試してみたい。
ギター 担当者 ()	調とコード進行はこれで本当にしっくりきているのか、少し不安で、今日は今まで決めていたコード進行以外も使ってみた。
ヴォーカル 担当者 ()	とにかく、たてこんフェイクした。テーマを聴いて、良いフレーズをピックアップして手をつけたい。楽器の運びはどう思っているのか、あと今日はたてこん意見も聞けたい。
キーボード 担当者 ()	音色の面白さを追求中。高、音色や落ち着いた音色や、その他ノイズ系の音も、ヴォーカルラインに重なりやすいようにカッパ長く入れた。

【次回の作業計画】

次回スタートは3学期? それそれ冬休み中にアイデアを考へて、持ち寄る?? - 応 作品として完成させろ??

指導事例3 コミュニケーションを通して楽曲理解を深め、豊かに表現するための合唱指導

音楽Ⅱ

1 題材設定の理由

本校の生徒は、人間関係が十分できあがるまで、歌ったり、考えを外に出さない傾向がある。第1学年の入学当初やクラス替えをした新しい環境では、お互いに強く意識し合うためか、音楽の授業はなかなか指導が難しい。教師と生徒、生徒相互の心の距離が近くなり、打ち解けあってはじめて十分声を出し、斉唱や合唱の実技指導ができるようになる。そのため、授業の雰囲気づくりに最も注意を払っている。また、人間関係ができあがり、ある程度声を出せる時期になっても、既習曲やよく耳にする曲には、すぐに興味をもち積極的に練習に取り組むが、新しい曲については、導入にかなり工夫を要する。しかし本来、歌うことの好きな彼等は、詩（歌詞）の内容について話し合っただけで考えを深めたり、メロディの美しさを取り上げて感じさせるなど、さまざま指導を工夫することにより、次第に積極的に取り組む姿勢を示すようになる。

そこで、合唱の授業においては、教師と生徒はもとより、生徒相互のコミュニケーションを十分図り、信頼関係を育てていくことが大事である。また、単なる技術の練習に偏らず、詩（歌詞）について深めるなど、他の教科と関連付けたりすることで、新たな自分の感覚に気付かせることができるのではないかと思われる。こうした活動を通して、楽曲理解を深め豊かに合唱表現することをめざし、本主題を設定した。

2 指導目標

- (1) 生徒とコミュニケーションをとり、信頼関係を深めながら表現する能力を伸ばす。
- (2) 詩（歌詞）の内容を考えて、他人の音楽解釈を尊重しながら自己の発見を促す。
- (3) 豊かな合唱表現を目指し、必要な基本的技術を習得させ、合唱の楽しみを味わわせる。
- (4) 生徒一人ひとりの学習意欲を高める。

3 合唱教材

「それが涙だと言うのなら」 銀色夏生作詞 三善 晃作曲

「時の旅人」 深田じゅんこ作詞 橋本祥路作曲

「TOMORROW」 杉本竜一作詞 富澤 裕作曲

4 指導計画（対象2学年）

◆1学期（8時間扱い）

- ・平易な斉唱曲や既習曲を数多く歌わせ、声を出すことに慣れさせ、歌う喜びを味わわせる。
- ・発声法の基礎を身に付けさせる。
- ・ノートを活用し生徒と教師のコミュニケーションを図ったり、また生徒相互のコミュニケーションを深める中で、どのように表現したらよいか話し合わせる。
- ・自分の音域や声質を理解させる。

新しい環境の中では、雰囲気づくりが大事である。平易な斉唱曲を題材に、また教科書や教科書以外の教材から既習曲を数多く歌わせる。この際、正しい音程、リズム、腹式呼吸など歌

唱の基本をしっかり押さえることを重視する。教材の例としては、「Caro mio ben」や「Largo」など基本的な曲を習得させたり、ポップスなどを取り入れ、声を出すことや歌う喜び、楽しさを味わわせることに重点を置く。

コミュニケーションを図る方法として、毎回の授業の最後に、ノートを使い、授業に対する評価を書くよう指導している。生徒たちは各自思い思いのコメントを書いてくる。例えば、「今日の授業は、最高に楽しかった。」「歌がこんなに良いものだとは思わなかった。」「進度が速くて、音程が分からなかったので来週はもっと丁寧に教えてほしい。」等の意見が見られる。中には、授業以外の相談をしてくる生徒もいるが、概してストレートに授業の感想や教師への評価をおつけてくる。それに対して、各ノートのコメント欄に、必ず一個人としての見地からコメント（返事）を書いてきた。こうした信頼関係を育てる指導の継続の結果、恥ずかしがらずに、表現することができるようになるのではないかと考える。

「負けないで」や「少年時代」等、2部合唱を取り上げる際は、両パートとも習得するようにしている。こうすることにより、自分のパートと他のパートが、どのような役割をしているのかを理解させることができる。両パート習得することは、自分の声域について知ったり、4部合唱をする際に、自分の声がどのパートにふさわしいか判断する基準となる。

また、詩（歌詞）の内容について話し合い、彼らのさまざまな解釈を取り上げるようにしている。こうして、多様な感じ方（個性）についての理解を深め、他人の意見を尊重し、より深い音楽表現を求めようになると考えられる。

◆2学期（12時間扱い）

- ・発声の基礎と演奏の向上を図る。
- ・「TOMORROW」や「それが涙だと言うのなら」などの3部合唱4部合唱にも挑戦させる。
- ・その曲の作曲者や作詞者に触れ、他の作品を鑑賞する。
- ・詩の内容を解釈し、生徒それぞれの解釈を尊重させる。
- ・詩を解釈することによって自己発見させる。


作曲者や作詞者について調べたり、歌詞について自由に解釈させ、意見を交換させる。また、音楽の表面的な理解に止まらず、背後にある表現意図を感じ取ろうとする姿勢を育てるように心掛ける。

パート練習では、音を聴くことを重視する。一つのパートが練習しているときには、他のパートはその練習を聴くよう指導している。また、ソプラノとアルト等2つのパートを組み合わせる時は、他パートがどのような動きをしているのか注意して聴かせることで、全体のバランスや自分のパートの役割を理解させる。

◆3学期（4時間扱い）

- ・合唱はある程度的人数が揃わないとできないことを考えさせる。
- ・合唱をつくり上げていく際、一人一人が責任をもつことが重要で、それぞれが色々なパートと関わり合うおもしろさをに気付かせ、各パートの触れ合いによって、音楽が完成していくことを理解させる。

5 学習活動の展開

指導内容	学習活動	指導上の留意点と評価の観点
<p>(第1次)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○楽曲構成の理解 ○歌詞の内容の把握 ○演奏表現の工夫 ○「それが涙だと言うのなら」の鑑賞 	<ul style="list-style-type: none"> ○詩の内容に着目しながら曲全体を三つのパートに分ける。 ○歌詞を読み、内容を分析する。 ○どのように表現をしたらよいかを考えさせる。 ○「それが涙だと言うのなら」の曲を鑑賞し表現上の工夫がどうであったか、また気に入った響の和音があったかを書き留めさせる。 	<p>それが涙だと言うのなら 銀色夏生作詞 三善 晃作曲</p>  <p>◆自主的・積極的に取り組んだかの確認</p>
<p>(第2次)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○他の生徒の詩の解釈の紹介 ○発声練習 ○パート分け ○パート練習 ○銀色夏生の他の作品を紹介し詩の能力を高める ○三善晃の他の合唱曲を紹介する ○自分の好きな詩や曲を持ってくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒の詩(歌詞)の解釈を紹介し互いに考える。 ○腹式呼吸で発声練習をする。音程を正確にとる。 SU ZU無声音、母音での発声 既習曲の復習 Caro mio ben、Largo、時の旅人などの復習 ○自分でパートを選択する。 ○音程を正しくとる。 ○銀色夏生の詩を自分なりに解釈し、他の生徒の解釈を紹介する。 ○「緑のたそがれ」青木景子作詞 三善 晃作曲の鑑賞。 ○記入用紙を配布し宿題とする。また、何故それがよいのかを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○詩(歌詞)を分析していく中で自分なりの感じ方(感性)を大切にしよう助言する。 ○姿勢、腹式呼吸はできていたか確認しながら進める。 ○希望を重視する。 ○パート練習では他のパートを聴き自分のパートの役割を考えさせる。 ◆他の生徒の解釈を聞くことができたかの確認。 ○「それが涙だと言うのなら」と比較させ感想を書いてもらう。 ○音楽(メロディーや詩等)が私たちにどのような影響を与えているのかを考えてもらう。

○全体練習	○4パートの重なり合いのおもしろ くを味わう。	○その和音がどのような和音の 構成であるかを確認させる。
○各パートで反 省点をまとめ る	○自分の好きな和音を選んでみる。 ○どんな点に注意して歌うかをまと める。 ○次回への目的を持たせる。	◆これまでの過程を生かして積 極的な表現がみられるか ◆合唱を楽しむことはできたか。

6 評価の観点

- (1) コミュニケーションを図り、お互いに尊重しながら表現することができたか
- (2) 他のパートとの関わりや、詩（歌詞）を理解していく活動を通して、自己発見することができたか。
- (3) 合唱に親しみ、楽しむことができたか。
- (4) 自主的に活動ができたか。
- (5) 音楽的なまとまりが見られたか。

7 考 察

合唱の授業では、生徒たちは既習曲など、親しみのある教材に対しては、積極的に取り組む姿勢をみせる。しかし、なじみの薄い新しい曲ではその積極性が見られなくなる傾向がある。その際、導入の工夫することで、自由に詩（歌詞）の解釈をさせたり、魅力的な和音の箇所を重点的に指導するなどすることで、興味をもち積極的に取り組むようになると思われる。

また、生徒と教師が詩（歌詞）の解釈について意見を交換するなどコミュニケーションを図るために、ノートをこまめに見るようにしている。このように、自分の解釈に自信をもたせることをまず重視したい。この後、パート練習でしっかり音をとらせて、自分の音に自信を持たせ、他のパートを聴き合い、友人との詩（歌詞）の解釈を話し合ったりする活動を通して、合唱の完成度が一層高まるものと思われる。

合唱の授業を通して、自分のパートの役割や、バランスをどう調整すれば音楽的かつ効果的であるか考えさせ、試みさせることによって、一層表現豊かな合唱へと仕上がっていくと思われる。しかし、最終的には、パート相互のかかわりと同じく、人と人のかかわりが大事であることを気付かせたいと考えている。今回、詩（歌詞）の分析をしているなかで、生徒たちに自分の好きな音楽について発表させた。音楽の詩（歌詞）やメロディーが好きな理由を書かせた。その中には、音楽が生活の中で不可欠なもの、重要なものだと述べたり、中には音楽が人生の支えになっていると書いた生徒もみられた。

高校生という多感な時期の揺れ動く感情を、合唱を通して表現するために、教師が授業において生徒理解を工夫し、生徒が互いに尊重し合うよう意見交換の場を設けるなどの工夫をすることにより、より豊かな合唱の授業が可能になると思われる。合唱の指導は集団表現、一斉指導が中心ととられがちであるが、生徒理解を基盤とした教師のきめ細かい指導の基で、個々の生徒の個性豊かな表現が生きる合唱という新たな魅力を引き出すことが可能になる。

1 題材設定の理由

国際化の進展が今後ますます加速するであろう21世紀の日本を生きる高校生にとって、世界の言語、文化、技術、芸術を身に付けることは大切なことである。一方、国際化には自国の文化・伝統を尊重するという側面があり、我が国の文化や芸術に触れ、理解することがさらに重視されるものと思われる。

本事例では、我が国の伝統楽器の一つである三味線に触れることを通して、生徒が興味・関心を持ち、我が国の音楽の素晴らしさを発見できるよう指導を工夫した。ここでは、まず、三味線の調絃指導を通して、自分の楽器の音をよく聴き、それとともに他の生徒の音を聴き合わせる。次に、演奏では、生徒が互いに音のない空白である「間」を感じ取り合わせる指導に重点を置いた。このような、我が国の音楽のもつ独特な表現を感じ取ることを通して、我が国の伝統音楽の理解を深めることを重視し本主題を設定した。

2 教材

長唄「勸進帳」より「舞の合方」(テキスト 野口啓吉著「三味線教本」音楽之友社)

他に 長唄「勸進帳」より「寄せの合方」 わらべうた「たこたこあがれ」

日本古謡「さくらさくら」 民謡「黒田節」「安来節」(テキスト 同書より)

3 教材観

- (1) 三味線の入門曲として、姿勢、バチの持ち方・叩き方、ポジション(勘所)の押さえ方、基本的な演奏法(スクイ、スリ、ハジキ、ウチ等)の指導ができる。
- (2) 物語と音楽、長唄と音階、転調(転音階)について深めることができる。
- (3) 子供の時に歌った良く知られている旋律があり、唄に合わせて三味線の伴奏ができる。

4 指導目標

- (1) 生徒同士お互い聞き合い、曲の旋律・間を感じ取らせる。
- (2) 三味線演奏の楽しさを味わわせる。
- (3) 三味線の基本的演奏法を習得させる。

5 指導計画(2学年2学期:7時間扱い)

1 時間目:基本奏法の復習(スクイ、ハジキ、スリ等)

2 ♪ : 既習曲の復習、新曲「舞の合方」の練習(最初~2段目まで)

既習曲; 「さくらさくら」(1年次1学期)「寄せの合方」(1年次2学期)

「黒田節」(1年次3学期)「安来節」(2年次1学期)

3 ♪ : 「舞の合方」(3段目~最後まで)




4 ♪ : ♪ (全曲を通して)


5 ♪ : ♪ (演奏しにくい難しい箇所中心に練習)

6 ♪ : ♪ (個人練習の時間を多く取り練習)……本時

7 ♪ : ♪ 暗譜テスト

7 本時の展開 (本時 6 時間目)

	指導内容	学習活動	指導上の留意点
第一次	<ul style="list-style-type: none"> ・三味線準備 ・調絃 	<ul style="list-style-type: none"> ・三味線バチ等を用意する。 ・本調子で調絃する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・海老尾に耳を当て、小さな音で調絃させる。 
	<ul style="list-style-type: none"> ・開放弦の練習 ・基礎練習 	<ul style="list-style-type: none"> ・絃をバチで打つ練習。 ・スクイ、ハジキ、ウチ、スリの練習。 <p>スクイ：叩いたバチの反動でバチ先をすくう奏法。</p> <p>ハジキ：絃を薬指または中指ではじく奏法。</p> <p>ウチ：絃を指の腹で「ン」とうち響かせる奏法。</p> <p>スリ：その指で指示された音まで絃をスル（ポルタメントさせる）奏法。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・必ずバチを返させる。 ・基本奏法を体得させる。
第二次	<ul style="list-style-type: none"> ・「舞の合方」の練習 	<ul style="list-style-type: none"> ・全曲を通して演奏する。 ・特にできていない箇所を練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スクイなどで速くなるので数え方に注意させる。 ・間を意識させる。 

	<ul style="list-style-type: none"> ・長唄における音階と形式の理解 ・まとめとして「寄せの合方」「舞の合方」2曲を通して演奏 	<ul style="list-style-type: none"> ・「勸進帳」の物語を読み、情景を理解する。 ・「寄せの合方」1回「舞の合方」2回続けて演奏する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・長唄の楽しさを感じさせる。 ・物語を読ませる。 ・2回目の「舞の合方」は速めに演奏させる。
第三次	<ul style="list-style-type: none"> ・「さくらさくら」の演奏 ・「黒田節」の演奏 ・「安来節」の演奏 ・後片付け 	<ul style="list-style-type: none"> ・二つのパートの分けて合奏する。 ・本調子を二上がりにして調絃する。  <ul style="list-style-type: none"> ・鳴り物（締め太鼓、小鼓、大鼓）も加わり合奏する。 ・本調子に戻す。 ・三味線を元の位置に戻す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・交代でパートを演奏させる。 ・二の糸を全音、音を高くさせる。 ・あらかじめ鳴り物担当の生徒を決めておく。 ・棹をよく拭かせる。

8 評価の観点

- (1) 長唄や民謡を楽しんで演奏できたか。
- (2) 基本的な演奏法を間違えずに三味線を演奏することができたか。
- (3) 日本的な「間」や音を生徒が互いに聴き合いながら感じ取ることができたか。

9 考 察

邦楽を授業で積極的にとり上げている本校でも、邦楽を学習する事に困惑する生徒がいたり、馴染めない生徒が一部見られる。このような生徒に一方的に日本音楽を押しつける事はできるだけ避けるよう配慮している。そこで、三味線の導入の仕方として、次のようなさりげない環境づくりを心掛けている。音楽室の壁に三味線を掛けておき、生徒が音楽室に来て自由に演奏することができるようにしている。こうした何気ないきっかけを与えることで、生徒に、「これは何だろう」「たぶん三味線という楽器だ」という興味をもたせ、「ちょっと音を出してみようか」という気にさせるようにしている。

調絃（チューニング）する時は、キーボードの音をよく聴く必要がある。最初の頃は方法が分からず、なかなか正しく合わせることができなかつたが、繰り返すうちに、何とか正確な音に合わせたいと意欲が出てくるようである。その結果、多くの生徒は調絃への意欲が向上した。しかし、中には繰り返し学習しても、キーボードの音に合わせられない生徒が何人か見られる。そのような時には、調絃できている生徒の音をよく聴くように促す。こうした活動の中で、次第に合っている音、合っていない音を生徒自身が体感できるよう工夫した。

また、三味線の音楽には、我が国の伝統音楽特有の「間」というものがある。これは西洋音楽における楽譜の休符に相当するが、五線紙に定量的に書き表せないものである。その「間」を経験し感じ取ることは、日本音楽の理解を深めるために不可欠である。こうした「間」は他の我が国の伝統音楽にも見られ、間を感じる指導を通して、我が国の文化を理解させるきっかけを与えることができると考える。「間」の違っている生徒は、一斉に演奏している中でも、次第に自分がずれていることに気づくようになる。そこでその場で、その生徒は他の生徒の音を聴くことで、正しい旋律、正しい「間」を体得することができる。こうした「間」を感得することで、結果的に、互いに音を聴き合い、演奏を楽しめるようになると思われる。

また、伝統音楽の楽譜を経験することも貴重な経験である。最初、慣れない生徒にとって、文化譜（三味線の楽譜）を見て演奏することは、難しいと感じるようである。しかし、繰り返し教師の演奏を聴いたり、生徒が互いに聴きあっていくにつれて、文化譜にも慣れて、かなり上達した。このように、苦労を重ねて一曲が演奏できるようになると、今度は「他の曲も演奏してみたい」という意欲の向上が見られた。

こうした活動を通して、生徒たちは、調絃したり、他の生徒と音を聴き合い、「間」を感じながら三味線を演奏することで、音楽を表現することに自信をもつと思われる。このことは三味線以外の音楽を表現したり、つくったりすることにも良い影響を与えるのではないだろうか。こうした活動は、自我の確立する時期の高校生にとって、大いに意義のある活動であると考えられる。しかし、今後の課題は、邦楽に馴染めない生徒に対する指導の在り方である。そのためには、我が国の伝統音楽を演奏、理解する意義について生徒たちに考えさせるような指導を工夫していきたい。

1 題材設定の理由

生徒一人一人の音楽嗜好、音楽経験、音楽環境の多様化は進展しており、授業への要求も様々である。そうした状況の中、教師主導の一斉授業だけでは、個々の生徒の要求を十分満たすことは難しい。また、生徒が協力し合い、相互にコミュニケーションを図りながら、音楽をつくり上げる活動を導きにくい。また、一部の生徒は、特定の分野では教師を凌ぐ知識や技能、音楽に対する価値観をもち、必ずしも教師から伝達された音楽だけが絶対ではないと考えている。芸術の授業は、彼等の個性が尊重されるのに最もふさわしい場であると考えられる。今後は、多様な音楽文化のごく限られた部分を伝達することよりも、感性に合う音楽を自ら選択し、自己の内面に育てるとともに、生活を豊かにすることがより重要になってくると思われる。そこで、生徒に好きな活動を選択させ、個性を十分尊重しながら自由に活動させることを通して、音楽を表現したり、興味のあるテーマを設け、音楽についての知識を探究させることを試みた。この活動を通して、① 自分と音楽のかかわり方を発見する。② 生徒が相互に協力し活動を進め、成果を発表し合うことで、互いをより理解し自他の良さを発見する。③ 教師が生徒一人一人の理解を深める。以上のことを目指し、本題材を設定した。

2 指導目標

- (1) 自由な活動を通して音楽の楽しさを味わわせる。
- (2) 自分の好きな音楽や、興味のある音楽活動の形態を発見させる。
- (3) 活動の過程を大切にし、他の生徒と協力し創意工夫しながら目標を達成させる。
- (4) 自己の良さを発見し、自信を持たせるとともに、他の生徒の良さにも気付かせ、尊重する態度を育てる。

3 指導計画（対象1・2学年 10時間扱い）

- (1) 活動の趣旨を説明し各自の課題を設定させ、活動計画表を提出させる。（1時間）
- (2) それぞれの計画に基づき活動を進めさせる。（約7時間）
- (3) 活動のまとめとして発表会を行う。（約2時間）

4 評価の観点

- (1) 意欲的に活動を楽しむことができたか。
- (2) 自分の好きな音楽や、自分に合った音楽の楽しみ方を発見できたか。
- (3) 他の生徒と協力し、創意工夫しながら活動できたか。
- (4) 他の生徒の良さを発見し、尊重し、自信を深められたか。

5 学習活動の展開と状況

(1) 課題設定

最も興味のある課題を自由に設定させ、演奏か研究（創作を含む）の活動を行う。内容、ジャンルは自由。演奏する曲は既存の曲でも自分たちの創作、編曲でもよい。途中2回の中間報告書を提出させ、活動の自己評価、変更点を報告させるとともに、教師は毎時間各グループや個人の活動を見て回り、助言、援助を行い、進行状況を把握した。

(2) 演奏と研究の選択

2年生では、78%の生徒が演奏を、22%の生徒が研究を選んだ。1年生では、演奏が95%、研究が5%で、どちらの学年も大半の生徒が演奏活動を選んだ。

(3) 演奏を選んだ生徒の演奏形態

2年生：独唱1% 合唱26% 独奏2% 合奏38% 合唱と合奏の混合20% バンド13%

1年生：独唱2% 合唱32% 独奏3% 合奏49% バンド15%

2年生ではヴォーカルにリコーダーや小打楽器の合奏を組み合わせる形態が目立ち、多くは創作を伴った。

(4) 演奏で取り上げられた曲目

カントリーロード 夜空ノムコウ イエスタディワンスモア グリーンスリーブス
憂色 星に願いを 空も飛べるはず エーデルワイス 帰れソレントへ
思い出がいっぱい 夢路より 青春の輝き サボテンの花 stand by me 未来へ
If we hold on together ます アメリカンパトロール Over drive Judy and Mary
True Love Sing 少年時代 君がいるだけで 四季より「冬」第2楽章
四季より「春」第1楽章 tomorrow never knows ジングルベル top of the world
Raining sebben crudell Caro mio ben ピアノソナタK332 Wish 他

(5) 器楽で用いられた主な楽器

ピアノ、エレクトーン、ギター（クラシック、フォーク、エレキ）、リコーダー（ソプラノ、アルト テナー、バス）、ドラムセット、木琴、鉄琴、オカリナ、クラリネット、すず、タンバリンなどの小打楽器

(6) 研究を選んだ者の研究テーマ

ベートーベンの生涯と交響曲 民族主義の音楽 シューベルトについて 私たちが選んだ4人の作曲家の生涯 8人の作曲家の生涯と影響を及ぼした人々 過渡期の音楽ビートルズについて、カーペンターズ シューマンについて 弦楽器の歴史楽器についてのレポート（歴史・分類）よい響きを得るためのホールづくり 等

6 教師の指導・助言・援助

活動の過程における教師の指導、助言、援助は次のようなものであった。

- (1) 選曲や曲目変更についてのアドバイス
- (2) 編曲のアドバイス、手伝い、副旋律やオブリガートの作成
- (3) 楽譜や文献の入手方法のアドバイス、出版されていない楽譜の作成
- (4) 合奏、合唱のハーモニーやリズムで合わない箇所の指導（生徒からの要請）
- (5) 合唱のグループの発声指導（生徒からの要請）
- (6) 練習方法についてのアドバイス

7 活動展開事例

(1) 楽器の上手な生徒が他の生徒を教えた例（1年女子3人）

吹奏楽部でクラリネットの経験のある生徒が、基礎から初心者 of 生徒に教え、簡単な旋律が吹けるようになった。しかし、技術的に高度な曲は難しいので、シューベルトの「ます」の旋律を演奏可能な調に移調して演奏した。その後、多小技術が向上したので、部分的に3部に編曲してハーモニーをつけて演奏した。

(2) 小さなきっかけから課題を発見した例（1年女子3人）

初め課題が見つからず木琴を弾いて遊んでいた。一人がアニメ「魔法使いサリー」のテーマソングを弾いたところ、もう一人がベース音を弾き出した。そこで、和音でリズムを作ることを助言したところ、コードを工夫して伴奏パートを作り、木琴の合奏を完成した。長い音を維持するのにトレモロを使うなど、奏法の工夫が見られた。

(3) 一般的な合奏形態ではないが、自分の好きな楽器を生かし工夫した例（2年女子2名）

オカリナを好きな生徒が、オカリナを使って演奏したいと希望したので、他の生徒が音色の合うソプラノリコーダーで合わせることを考えた。こうした編成の楽譜は出版されていないので、「君をのせて」を自分たちで2部に編曲して演奏した。

(4) CDの演奏を聴いて発見したことを自分たちの演奏に生かした例（2年男子6人）

「夜空ノムコウ」を選曲し、ギター伴奏で歌うことにした。CDを聴いて練習するうち、2部になっている部分を見出し、自分たちも2部に分かれて歌うことにした。副旋律を聴き取り、2部のハーモニーをつくとともに、前奏にウインドチャイムの音や、裏声のオブリガートも再現し、聴く者を楽しませた。

(5) 合唱のメドレーを自分たちでつくった例（1年生女子8人）

最初、曲を絞り込めなかったが、クリスマスが近かったことから、クリスマスソングをメドレーに編曲することを思いついた。曲のテンポや明暗の感じから曲順を考え、女声2部のハーモニーを自分たちで編曲しながら練習を進めた。最終的には、鈴などの小打楽器を加え、雰囲気豊かなオリジナルクリスマスソングメドレーを完成した。

(6) 既成の編曲を基に自分たちの技量に合った合奏をつくった例（1年男子7名）

「True love」をソプラノ、アルト、テナー、バスの4部に編曲した楽譜を使用して練習していたが、内声部の伴奏のリズム型（分散和音）が技術的に難しく合わせられなかった。

練習を進める中で、コードの構成音であればリズムを変えてもハーモニーが保たれることに気付いた。そこで、自分たちに演奏可能なリズム型を作り、合奏を完成させた。

8 考察

発表の時間は、担任を招き大いに盛り上がり、他の生徒の演奏を好意的に聴く姿が見られた。学年末のアンケートでは、「この活動をまた是非やりたい」との意見が多かった。全体を通して、生徒間、教師と生徒間のコミュニケーションを、一斉授業と比べてより深めることができた。しかし、「美的なものの探求」と気楽に表現する「楽しさ」とのジレンマが課題として残った。高校生の発達段階において、ただ楽しいという段階にとどまっていたよいはずはなく、さ

表現を深めたり、発展した指導を行う必要がある。これは、音楽の教科としての存在意義とかわる大きな問題である。また、このような活動では、仲間との意志疎通が活動の成否を決定するが、仲間と十分コミュニケーションを図れない者が意外に多くみられた。その他、音楽室以外で音を出す活動が難しいので、互いの音が混ざり合い、自分の音を聴き取りにくく、練習を進めにくいなど施設面の問題があった。

この活動を通して得た最大の成果は、教師の生徒の一人一人に対する理解が深まったことである。一斉授業の中では気づかない、彼らの能力の高さに驚かされたり、生徒の人間関係や一人一人の性格、グループ活動における他者との関わり方や、日常的に音楽とどのように関わっているかなどについて、新たに知ることができた。この活動によって得た個々の生徒の情報は、その後、教材の選択や、授業内容や活動形態の工夫に生かすことができた。

私達が選んだ

4人の作曲家の 生涯

8人の作曲家の

楽器についてのレポート

楽器にはオーケストラや吹奏楽に使う楽器や日本の楽器に使う楽器などがあるがこのレポートでは西洋で発達したオーケストラや吹奏楽に使う楽器を大きくする。

① 楽器の分類

オーケストラや吹奏楽に使う楽器には大きく分けて四種類に分けることができる。まずバイオリンやチェロなどの弦の振動を発生体とする弦楽器。木で作られたフルートやクラリネットなどの文字どおり木で作られたフルートも木で作られた金管楽器、トランペットやトロンボーンなどの金管で作られた金管楽器、そして木管や木管の吹いて音を出す。オーケストラでは木管楽器のサクソフォーンを除いた(コントラバ)三つの楽器を使う。

② 楽器の音の出し方

弦楽器
バイオリンやチェロなどの弦楽器を出すには弓というものが必須でその弓に弦を弾きながらこすり付けて振動させ、共振器や共振器音を大きくする。

ギターやハープなどは弦を共振器によって音を出す。
木管楽器
フルートやピッコロなどは管内に空気を送り共振させて音を出す。

クラリネット(1枚リード)やオーボエ(2枚リード)はリードを共振器を鳴らして音を大きくする。

1945	39	《交響曲第9番》作曲、ソヴィエト連邦国歌のレン
1947	41	シゲイフによる、北沢利雄の
1948	42	オトリオ《新の歌》作曲、朝美
1949	43	大成功を収めた。オトリオの

プッサマイヤー
オーストリアの作曲家。ウィーンでフルートの名手として活躍した。

キツラー
オーストリアの作曲家。フルートにフーガーの交響曲を作曲した。

サイドル
フルートの名手。フルートの交響曲を作曲した。

アラームス
フルートの名手。フーガーの交響曲を作曲した。

ヘルムスバルカー
オーストリアの作曲家。フルートの名手として活躍した。

アルネート
オーストリアの作曲家。フルートの名手として活躍した。

シヤルワ
オーストリアの作曲家。フルートの名手として活躍した。

ニコシユ
フルートの名手。フルートの交響曲を作曲した。

ヘルムスバルカー
オーストリアの作曲家。フルートの名手として活躍した。

セセマー
オーストリアの作曲家。フルートの名手として活躍した。

ワグネル
フルートの名手。フルートの交響曲を作曲した。

ニコシユ
フルートの名手。フルートの交響曲を作曲した。

ヘルムスバルカー
オーストリアの作曲家。フルートの名手として活躍した。

セセマー
オーストリアの作曲家。フルートの名手として活躍した。

1906年 0月 9月25日

1915 9 年12月

1919 13 日10時

この曲は日本でリリースされ、よく知られています。1933年ラフマンのリクエストの作曲家としてのリクエスト。再録して、73年の暮れにリリースされました。

涙の乗車券
この曲が私達のデビュー曲です。69年朝刊のある日、リチャード・ストランドの「涙の乗車券」が「オールタイム」で放送された。また、主に11月、12月、1941年にこれを「海流」に収録し、1942年に「アムステルダム」に収録しました。この曲は、リチャードが作曲した。この曲は、カペランタスとA&Mとの契約条件でリリースされた。この曲は、ストランドの名曲であり、バージョンは「レバー・リクエスト」で、その曲の注目を集めた。この曲は「涙の乗車券」に続くシングルがリリースされた。

青春の輝き
カペランタスによるバージョン。彼の全曲の中で、カペランタスとA&Mとの契約条件でリリースされた。この曲は、ストランドのバージョンと異なる。


大サート・スマ
この曲は、ストランドの名曲であり、バージョンは「レバー・リクエスト」で、その曲の注目を集めた。この曲は「涙の乗車券」に続くシングルがリリースされた。

ジョンバラヤ
この曲は、ストランドの名曲であり、バージョンは「レバー・リクエスト」で、その曲の注目を集めた。この曲は「涙の乗車券」に続くシングルがリリースされた。

民族主義



ホルは、「最初あまりのいい感じか」で「出た」きた。リジョンが「入れた」不朽の曲だった。事務所から受けた時、彼は「代リス」の早朝で、家にはホルの「11月」で、彼は「飲み」めし「れ」を受け、家では「ひとり」な「だけ」で「懐」には「あ」おは「つ」く「を」受けたまま、その日の彼にジョンの死について「It's a drag. (おは)」と「さ」る「新」成「に」けた「人」と「を」に「さ」る「精」い「い」い「音」者「を」見た時、涙があふれた。



IV 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

今年度の研究員は「音楽を通して、生徒が互いに尊重し合い自己発見を促す授業の在り方」を研究主題に研究を進めてきた。この主題に至るまでの道のりは長かった。この過程は研究の経過に詳細に述べられているとおりでである。委員一同、生徒の実態が大いに異なるという、正に多様化を実感することから研究を開始することとなった。当時検討した内容は次のものである。① 生徒理解の必要性 ② 生徒に授業で何を身につけてほしいか。③ 生徒の多様化 ④ 生徒を取り巻く音楽環境 ⑤ 専門高校（音楽科）のカリキュラム こうした課題は各委員の事例に含んであるが、多様化については、調査研究の必要性を感じたので、事例1として独立させた。また、研究の過程で、検討に時間を要したのは生徒を取り巻く「音楽環境」についてである。これについては、まだ、明確な結論は出ていないが、事例1の高校生の音楽嗜好調査からある程度読みとることができた。

【事例1】 高校生の音楽嗜好が多様化している実態を把握するため、アンケートを実施した。また専門高校（音楽科）においては、音楽を取り巻く社会の変化に対応した専門教育の在り方を検討するための資料として、生徒の音楽観やカリキュラムについて調査を行った。

【事例2】 生徒に興味・関心の高いポピュラー音楽を教材として用い、生徒同士互いのコミュニケーションを深めることをねらいとした。バンド活動を通して創作活動していく中で意欲的に活動に取り組み、活発な意見交換がみられ、相手の聞き方、感じ方、表現意図を知り、最終的に自分自身の感性を認識することができた。

【事例3】 合唱指導における授業の在り方の研究であった。合唱の基本は自分のパートをしっかりと歌い上げるとともに、他のパートを聴きながら自分のパートの重要性を理解することである。ここではこうした基本を踏まえて、歌詞の意味を生徒に考えさせ、意見交換する指導を工夫することで、一層表現が深めることができた。

【事例4】 三味線の演奏を通し、生徒が互いに音を聞きながら日本音楽のもつよさを理解していく指導であった。調絃する活動の中で、音へのこだわりを感じ取り、演奏する際は互いに音を聴き合うことで、我が国の伝統音楽独特の「間」を体験させることができた。こうした活動を通して、三味線に親しみつつ、表現を深めることができた。

【事例5】 生徒一人一人の音楽的関心が多様化していることから、個々の生徒が好む音楽を自由に探究させ、授業を展開していく試みであった。一斉授業では目立たない生徒が意欲的に活動したり、生徒同士が協力して楽しんで音楽をつくっていく姿がみられ、教師の生徒一人一人に対する理解を深めることができた。

2 今後の課題

合唱や合奏など、多くの生徒が一つの表現に向かって取り組む時、本来一人一人異なる生徒の感じ方や個性をどう全体の音楽表現に生かすか。生徒間、教師と生徒のコミュニケーションをより一層図り、音楽をつくりあげる喜びを味わわせるには指導方法をどう工夫するか。楽しさと表現の深まりをどう両立させていくか。我が国の伝統音楽の素晴らしさをどう授業で広めていくか、こうした課題が今後の課題として残った。今後、各授業実践において研究を継続する。